

『双子は手負いの獣を飼う』

著：あさひ木葉

ill：小路龍流

「怯（おび）えることはない」

尊人は静かに言うと、近づいてきた。

「黎人に無茶をされたのだろうか？ 手当てをしてあげよう。傷はついていないかもしれないが、薬を飲んだほうがいい」

「薬……？」

思わぬ言葉に、拍子抜けする。

一体、どうしたというのだろうか。

「内臓を弄（も）ぐられたんだ。熱が出ているだろう。たいしたものじゃないが、体力回復をできるものと、解熱剤だ」

そう言って、尊人は錠剤を渡そうとする。だが、差し出された手を、竜生は睨みつけることしかできなかった。

それを受け取りたくないというよりも、単純に体が動かない。

「警戒しなくても変な薬じゃない」

尊人は、小さく息をつく。

「私は、君の敵でも味方でもない」

そして彼は、思慮（しよ）深げな長い睫（まつげ）を伏せる。

「……君は、黎人に拾われたんだらう？ 彼の思うように可愛がることのできる、ペットとして」

尊人の視線は冷静に、竜生を見据えた。

「……そういうものが、黎人には必要だ」

「……」

竜生は黙（も）り込む。

違う、とは言えない。

たしかに黎人はそう言って、竜生を招き入れた。

行き場所がない竜生には、他に選択肢（せんたくし）もなく。

だが……。

「こういう扱いをされるのは、想像できなかったのか」

尊人の言葉は、衝撃的（しんげきてき）だった。

「できるか……っ」

竜生は歯（は）ぎしりする。

これが、可愛がる？

ペット？

信じられない。

快樂（たいてき）を押しつけられ、引き出されて、圧倒（あつぱく）的な力（ちから）の下（した）に服従（ふくじゆう）させられた。

ぞっとする。

黎人はおかしい。

あの底知れぬ笑（わら）みには、狂気（きやうき）が潜（ひそ）んでいるのではないか。

単純（たんじゆん）な暴力（ぼうれき）しか知らなかった竜生は初めて、歪（よこ）んだ恐怖（こふ）を知（し）った。快樂（たいてき）は暴力（ぼうれき）なのだ、思い知らされた。

「……で、どうする」

静（しず）かに、尊人は問（と）いかけてくる。

「逃げたいか？」

「え……っ」

尊人は、黎人が竜生に何をしたのか知っているはずだ。しかし動揺（どうご）も見せず、まるで患者（かんじや）に容態（ようたい）を尋（たず）ねる医師（いし）のような調子（てうし）で、静（しず）かに問（と）いかけてくる。

尊人の瞳（ひとみ）から、彼の感情（かんじ）は窺（うかが）えない。

ただ、竜生（りゆうせい）を見ているだけだ。

「逃げたい、と言（い）ったら……」

呟（ささや）いた声（こゑ）は、掠（さら）れていた。

喘（せ）ぎ啼（な）かされ、淫（よ）らな嘆願（たんげん）を強（こ）いられて、声（こゑ）も哽（か）れていたようだ。

「逃（に）がしてやってもいい」

尊人は、そう言（い）い切（き）った。

「黎（れい）人も、逃（に）げた者（もの）までは追（お）わない」

「.....そう、なのか」

「ああ。あいつは、犯罪を犯したいわけじゃないから」

黎人が竜生にした振る舞いを知って、そんなことを言えるのか。竜生に言える義理はないが、あれが犯罪じゃなくてなんだというのだろう。

しかし、うすうすわかってもいた。

何度も言われたのだ。「ペットにしてあげる」と。ペットになるなら、拾ってあげる、と。

そして、竜生は拾われた。

(黎人の言う、ペットとはこういうものなのか)

竜生は、その意味をわかっていなかった。

そして、人に命を預けることの恐ろしさも。

今までだって、そういう世界で暮らしてきたはずなのに.....。

彼に救われた命の恩を返すならば、圧倒的な快樂に苛まれる、この状況を受け入れなくてはいけないのだろうか。

これから、ずっと。

(.....逃げる)

その言葉は、魅力的だった。

快樂という責め苦には、とても耐えられそうにない。何より、黎人が怖ろしくてたまらなかった。

だが、それは言葉にならない。

竜生には、行き場なんてどこにもないのだ。

体の傷は塞がったものの、竜生が命を狙われる立場というのには変わりがない。当てもなく、新宿をさまよえる身の上でもなかった。

いざとなったら、爆薬を抱えて相手のところへ突っ込む覚悟はある。

でもそれも、得物がある。仇の懷まで入りこんだ上でないと、傷つけるのは難しいだろう。

ヤクザには関係ない、竜生とのつながりなんて見つけられるはずもない、この家に匿われて時を待つのが上策だ。

ならば、耐えるしかないのか。

全身に怖気が走る。

暴力的に犯されて、それでも受け入れなくてはいけないなんて.....。

(オヤジのためだ)

奥歯を噛み砕かんばかりの勢いで食い締めながら、竜生は自分に言い聞かせる。

所詮、誰にも頼れない身だ。

手段は選べない。

「どうする。逃げるか？」

重ねて問いかけられ、竜生は迷わず首を横に振る。

「.....ここにいる」

そう、傷が癒えるまでは。

「本気か？」

意外そうに、眼鏡の奥の瞳が細められた。

顔が近い。

黎人と尊人は、印象がかなり違う。でも、基本的な容姿は似ていると、あらためて思う。

どちらも端正な容姿だ。美男子という、古めかしい言葉が、ぴったりと当てはまる。セックスの相手など、不自由もしなさそうだ。

それなのに、歪んだセックスでしか満たされないのだろうか。

「.....ああ」

竜生は頷いた。

命を奪われるわけでもなく、ただ欲望のはけ口になればいい。それがどれほど恐ろしく、苦痛を伴う行為だろうとも構うものか。

目的のために、涙を呑むのだ。

「わかった。好きにすればいい。なにかあったら、手当てくらいはしてあげよう」

尊人は小さく溜息をついた。

この男は、兄の蛮行を見過ごすことに、少しは良心が咎めているのだろうか。

窺うように見つめれば、尊人は目を細める。

「君は頑丈そうだから、もつかもしれないな」

そう言って、彼は竜生の頬を撫でる。

ぞっとした。

その指先から感じたものは、竜生の体を弄んでいた時の黎人から感じたものと同じだったのだ。

優しい温もりなどではなく.....。

「は、放せ……っ」  
思わず声を上擦らせると、尊人は手の動きを止める。  
そして、目を細め、口の端を上げた。  
「安心しなさい」  
彼は囁く。  
「ひどいことはしない」  
その言葉は、信用していいのだろうか？  
わからない。  
じっと尊人を見つめていると、小さな笑い声が聞こえてきた。  
戦慄する。  
尊人の肩越しに、黎人の姿が見えた。  
いつ戻ってきたのか、彼は鞭を持ったまま、ゆったりとドアに背を預けている。  
「黎人」  
どこか咎めるように、尊人が名を呼ぶ。すると黎人は、慈愛に満ちた微笑みを浮かべながら尊人の傍へやってくる。  
「半分こだよ、尊人」  
歌うように弾んだ声で、黎人は囁いた。  
その途端、尊人の肩がぴくっと動く。  
「その子なら、大丈夫。きっと我慢してくれるよ。……そういう顔、してるから」  
尊人は、無言で竜生を見つめている。  
しかしその瞳が、わずかに動いた。  
冷静で、感情の見えない瞳が一瞬鋭く光り、その瞬間に心臓を貫かれたような心地になった。  
切れ長の瞳の、色の薄い瞳孔が大きくなったように見える。その奇妙な表情の変化に、竜生は思わず息を呑んだ。  
黎人に感じたような、得体の知れない恐怖心を抱いたわけじゃない。もっと本能に根ざすような、恐怖心を掻き立てられた。  
そう、たとえば猛獣に貪り食われる草食動物の恐怖だ。  
「半分こ、か」  
それは、まるで何かのまじないの言葉のようだった。  
黎人は身を翻すと、姿を消す。あたかも、尊人と竜生を二人っきりにさせてやろうとでもいうかのよう  
に。  
黎人が消えても、怖気は消えない。  
恐怖を感じるのは、黎人だけではなかった。目の前の男に対しても。  
「……竜生」  
尊人の顔が、近づいてくる。  
黎人と違って表情には乏しく、そのぶん華はないが、やはり整った顔立ちをしている。硬質な美しさ  
だった。  
「兄さんに、どうやって抱かれた？」  
気品すら感じるカーブを描く口唇が、ほんの間近で問いかけてくる。  
その途端、体の震えが一際大きくなった。  
尊人が黎人のことを、「兄さん」と呼ぶのは初めて聞いた。  
こんなときに、そんなくだらないことを、竜生は思った。

本文82P～92Pより抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>